

国語教科書における写真教材の研究

— 『小学国語読本』のばあい—

砂川 誠司

(2011年12月2日受理)

A study of photographs as teaching material in a Japanese language textbook: in the case of “SHOUGAKU KOKUGO TOKUHON”

Seiji SUNAGAWA

Abstract. In this study, I clarified the positioning of the photographs in the experience to read “SHOUGAKU KOKUGO TOKUHON” which is the textbook which photographs were printed on in Japanese language textbook for the first time. The photographs were not a technically high quality thing, but the experience to read a textbook became rich. It changes with positioning of experience which looks at a photograph. For example, the photographs of “Tokyo” has possibility to allow a learner do complicated different experience, or the photographs of “Inu No Tegara” is given meaning to variously by being united with a reading of the text. After “SHOUGAKU KOKUGO TOKUHON” publication, it was with an important element of one which controlled the experience that it read a textbook what kind of photographs got into the textbook and how it had been treated.

0. はじめに

第四期国定国語読本である『小学国語読本』（通称・サクラ読本、以後「サクラ読本」と記述）は、児童の心理に寄り添う形で教科書を作りたいという読本編纂側の願いから生まれ、感情を基礎とする叙述からはじまることや多くの文学的教材を採用しようとしたことなど、読本編纂の方法において画期的な教科書とされたものである。そして、この読本が画期的であった点のひとつとして、多色刷りの挿絵を用いたことはよく知られている。カラフルな色彩とポップな画風で興味をかきたてることは子どもたちが国語の学習に自然と入り込むことを可能にするものであったと推測される。だが、こうした視覚的な要素における画期的な点のひとつに巻五以降から写真凸版を用いたことは実はあまり知られていない。

今では教科書に写真が用いられていることはじつにありきたりなことである。試みに現行（平成23年度版）の小学校国語教科書（1上）を見てみると、ほとんどの教科書で説明的文章教材に写真が用いられていることがわかる¹。それもかなり

精度の高い写真である。さらに学年が上がると報道写真や風景写真、家族写真などより多様な写真が配置されていく。このように教科書に写真を配置することはすでに一般的なこととなっているのだが、一方でそうした教科書を読むことがどのような体験として読み手のうちになりたつのかということむしろ見えにくくなっているといえるかもしれない。写真は文章の理解を補助する役割があるといえるが、ではどのように補助するのか、あるいはそうした補助によってテキスト全体はいかに理解されるものとなるのかということは必ずしも明確ではない。本稿はこうした問いに答えるかたちで教科書における写真の位置づけを明確にしようとするものである。特に本稿では、写真利用を開拓した教科書ともいえる「サクラ読本」を事例として、その写真利用のあり方をひも解くことで先の目的を達成する一助としたい。

「サクラ読本」の刊行がはじまった昭和8年当時は、すでに写真の印刷技術はある程度成熟し、個人用カメラが徐々に普及し始めていた時期である。現在の技術とは異なるものの、写真そのもの

が一般の人々により親しみのあるものとなりつつあるなかで教科書にも写真が入り込むこととなった。こうした時代背景を踏まえつつ、本稿ではまず、「サクラ読本」に配置された写真を精査し、どのような特徴があるのかを捉える。また、可能なかぎりそれら写真の具体的な点に踏み込んでそれらの写真を見るのがどのような経験としてなりたつかということ調べる。こうした作業を通じて「サクラ読本」における写真教材について、その位置づけを明確にしたい。

1. 「サクラ読本」刊行当時の写真をめぐる状況

現在と「サクラ読本」が刊行された当時とは写真機そのものから印刷技術まで、写真をめぐる状況はかなり異なる。写真について考察する視点として現在の考えを単純に適用することは避けなければならない。したがってまず、「サクラ読本」の写真を具体的に考察する前に、この読本が刊行された当時の写真をめぐる状況を概観しておきたい。といってもここでは後の考察ともかかわって、写真による表現、そして写真の製版・印刷・出版などの側面に限って概観しておく。

サクラ読本の巻一が刊行されたのは昭和8年(1933年)、初めて写真が用いられた巻五は昭和10年(1935年)、そして最終巻である巻十二は昭和14年(1939年)である。まず、1930年当時代の印刷出版文化の状況であるが、海野弘(1986)によれば、1930年代は次のように語られている。

複製芸術としての写真は、印画紙に焼き付けられる段階から、製版されて印刷される段階に達して、まったくちがった複製芸術の水準に上がったのであった。写真ジャーナリズムが生まれ、写真によってとらえられたイメージは、同時に世界中に伝えられることが可能になった。第一次世界大戦まで、最もポピュラーな写真メディアは絵はがきであった。しかし、二、三〇年代には、印刷された写真が、雑誌などを通じて、それまでとは比較にならないほど大量に複製されて、広まっていった。日本もまた、そのようなメディアの環(わ)に参加することによって、写真の新しいビジョンに同時代的に対応していたのであった。²

明治中ごろから大正にかけては、洋式の印刷技術が導入されたことなどによって印刷業の規模が

大きくなった時代であり、そして新聞や雑誌、書籍の需要が高まった時代であった³。その先に、上の引用にあるような状況が現れることになる。写真が紙に印刷されたものとしてあり、一般の人々が簡単に手にとることのできるものであることが、1930年代には一般的になったようである。こうした状況が「サクラ読本」の編纂に写真を用いさせるよう影響したことは想像に難くない。ただし、現在とはちがって教科書は安価で提供しなければいけないという性格から、使用できる印刷技術は雑誌や広告で用いられるほどの高水準のものではなかった⁴。

写真の表現については、飯沢耕太郎(1999)によれば、彼が「新興写真」の開花」と「報道写真の展開」を述べるなかで1930年代について触れているものを示しておく。「新興写真」とは、飯沢によれば、「(関東大震災以降に現れてきた：砂川注)近代都市の環境に対応し、写真の表現可能性を最大限に拡張した」ものであり、「都市の情景を小型カメラでとらえるスナップショット、物の細部に潜んでいる美を浮き出させるクローズアップ、光そのものを造形するフォトグラムやフォト・モンタージュのような新しい写真表現の技法」が当時の「意欲的な若手作家たちの心をとらえた」とされるものである⁵。また、「報道写真の展開」として語られていることなかで「サクラ読本」の考察にとって大事と思われることは、報道写真のあり方にたいする理想とその実現の挫折である。飯沢は美術評論家である伊奈信男の報道写真の定義に対して、「そこには「言葉や文字」、あるいは「絵画」とは違った形で送り手のメッセージを伝達する写真というメディアへの強い期待がある。複数の写真が一種の視覚的記号として組み合わされ(「組写真」)「印刷化」によって「大衆的伝達」が可能になることで、それは複雑な思想(イデオロギー)すら表現可能な「武器」となるのである」と述べている。しかし、「戦時体制の強化と物質の欠乏の中で、芽生えたばかりの報道写真の理想はずたずたに引き裂かれていった」という⁶。

ここではごくおおざっぱに当時の写真をめぐる状況を概観した。まとめれば、写真が印刷物のなかに入ることが一般的となった一方で、表現として複雑なテクニックを使うようなものも登場しそ

の可能性は拡張され、さらにそうした新しい表現を理論的に支えるものも整ってきたのがこの時代である。こうした背景のなかで読本への写真利用ははじまったのである。

2. 「サクラ読本」全体への写真の配置

先にも述べたように「サクラ読本」は巻五から写真の掲載をはじめた。さらにそれは下巻になるにしたがって増加する傾向にある。各巻における写真の枚数は、巻五4枚、巻六13枚、巻七13枚、巻八29枚、巻九23枚、巻十31枚、巻十一46枚、巻十二35枚である。また、各巻における写真を採用した課の数と、教材の種類との関係を表1に示した。考察の便宜上、説明的文章の記録・報告等の項目は地理的内容のもの、理科学的内容のもの、その他に分けてある。

表1をみれば、写真を採用する課の数も下巻になるにしたがって増加する傾向にあることがわかる。それは、基本的に下巻になるほど説明的文章に写真が多く採られるようになるためであるが、なかでも地理的内容が書かれたもの、すなわち地理的教材の存在によって増加が生じている。例を挙げれば巻六にある写真全13枚のうち10枚は第二十四課「東京」の写真である。そして巻十一では4課ほど地理的教材があり、その4課を合計すると写真は21枚採られている。また、地理的教材以外にも巻十以降では多くの説明的文章に写真が使われている。表では「その他」の項目にあてたものであるが、これにはたとえば巻十第十八課「南極海に鯨を追ふ」(pp.113-120)、第二十五課「汽車の発明」(pp.156-161)、巻十一第五課「法隆寺」(pp.25-35)、第二十六課「鉄眼の一切経」

(pp.173-178)、巻十二第十三課「機械化部隊」(pp.80-85)、第二十課「裁判」(pp.153-159)などが含まれる。文章の形態からいえばルポタージュや解説文など、内容面からいえば歴史的内容、公的内容などのものがここにある。いずれにせよ、説明的文章への写真利用は下巻でほぼ常態化したといえるだろう。また、数は少ないものの、文学に写真を利用することもある。これは数が少ないのですべて挙げてみると、散文では巻五第三課「おたまじゃくし」(pp.11-17)、巻六第二十二課「潜水艦」(pp.115-121)、巻八第三課「呉鳳」(pp.12-18)、巻九第一六課「三日月の影」(pp.74-91)、巻一二巻第二十六課「静観院宮」(pp.185-194)、韻文では巻八第二十課「廣瀬中佐」(pp.112-115)、巻十二第七課「鎌倉」(pp.46-49)である。文学に関してみればこれらのほとんどがいわゆるノンフィクションである。事実にもとづくものであるゆえに、文章に描かれた事実と関係する写真が使われたと考えられる。

「サクラ読本」全体への写真の配置に関してさらに、使用された写真の印刷技術について指摘しておかなくてはならない。「サクラ読本」の編集者のひとりであった井上越は、巻八に関して次のように述べている。

段々この(写真の：砂川注)数が増加して参つたのは一面に教材そのものの性質からも要求されることであると共に、一面には寫眞凸版の技術が、この教科書の紙に印刷して見て如何にも信頼が置けるものですから段々数をふやして参つたのであります。(中略：砂川) この紙に寫眞の印刷の凸版の印刷が出来るとか危ぶまれたのですが、これも巻六以降精巧に印刷することが出来た、その印刷も非常に信頼が置

表1. 写真のある課の数と文章の種類 (括弧内は写真の枚数)

		巻五	巻六	巻七	巻八	巻九	巻十	巻十一	巻十二	計
文学	散文	1(1)	1(1)		1(1)	1(1)			1(1)	5(5)
	韻文				1(1)				1(5)	2(6)
説明的文章	随筆			1(3)	2(4)	1(2)				4(9)
	伝記		1(2)	1(1)	1(2)		1(1)			4(6)
	記録報告等									
	地理的		1(10)	1(7)	3(12)	3(12)	3(11)	4(21)	3(13)	20(86)
	理科学的				1(9)	1(2)	1(3)	2(9)	1(1)	6(24)
	その他	1(3)		1(2)		2(6)	5(16)	9(16)	9(15)	25(58)
合計/総課数		2(4)/25	3(13)/25	3(13)/26	9(29)/26	8(23)/28	10(31)/27	15(46)/28	15(35)/27	65(194)/212

けると思ふものですから巻の八にはかなり寫眞凸版が多くなって参りました。⁷

ここには読本教材に写真の数が増加した理由として読本に写真を印刷することに成功した印刷技術の向上について記されている。この内容に、読本のような紙質のものにでも写真を印刷することができるという自負がうかがえる。

ところが友納友次郎（1933-1938）の発言によれば、印刷技術についてはまだ改善の余地があったかのように思われる。「サクラ読本」刊行当時、その実践的取り扱いについて研究した著作が数多く出版された⁸が、なかでも友納は写真への言及を深くおこなった論者のひとりである⁹。友納の著作は巻ごとに順次出版されたものである。その写真に対する発言を順に取り出せば次のようになる。ひとつめは、巻五第二十二課「犬のてがら」（pp.101-104）の解説のなかで「挿絵の印象」として書かれたものである。

新讀本が、始めて試みた寫眞刷である。實況を思はせるには寫眞に越した事はないが、これだけの印刷技術を持たなかつた在來の讀本では、望んでも出来ない要求であつた。我々は茲に新色滴々たる挿畫を前にして、今更ながら印刷技術の進歩に驚くと共に、科學文明の恩澤の甚大さを感謝せずには居られない。¹⁰

次にみるのは巻七第十二課「兵營だより」（pp.47-53）の写真解説のなかでの言及である。

寫眞版は一名網目版とも云ひ、（之は網目百線位である）滑らかな紙質のアート紙を使へば、百五十線から二百線位の精巧な寫眞版となり、殆ど寫眞印畫に近い印刷と成るが、讀本ではそれ程高級な印刷用紙を使う譯にも行かないから、先づ印刷として上乘のものと言へる。¹¹

巻八以降では、その概説に「挿画概説」の項目が設けられた。そして巻八の写真全体について次のように述べている。

當局の寫眞版に對する考は依然として古く、相變わらず時代遅れの寫眞技術に終始して居るのは甚だ遺憾である。二十數葉に互る風景寫眞が、一二を除いては殆ど全部舊式の普通原版を使用した點なども、此の讀本としては全く千慮の一失であらう。

（中略：砂川）之が昭和十二年度に刊行された我が新讀本かと思ふと甚だ心細い。所詮は數年前の寫眞版を其の儘流用した骨惜が、此の結果を招來する一因で有つたと臆測されても辯護の餘地は有るまい。¹²

以上に巻五から巻八にかけての友納の写真に対する発言を取り出してみた。巻が下るごとに写真を印刷する技術への期待が薄れていくさまが伝わってくる。同時代の写真をめぐる状況を考慮すれば、友納のいう「昭和十二年度」は表現としても印刷技術としてもある程度成熟してきた時代であるから、なおさらその期待は高かったかもしれない。「サクラ読本」の写真を質の低いものとするのは、こうした同時代的写真観からくる発言であると思われる。

先に見た井上の言及は、友納が巻五に関して述べたようなこととは重なるが、同じ巻八に関して述べたこととして比べればその認識は大きく異なるもののようにみえる。友納の発言に返すかたちではないが、井上（1937）はこのあたりのことについて「小学国語読本編纂史」のなかで次のように触れている。

世間では寧ろそれ（多色刷りのこと：砂川注）を以て特色の第一に數えてゐる。元來これは専ら書物の定價と關係する問題である。もし國定讀本の定價が少々高くてもかまはぬものであれば、いふまでもなくもつと早くそれが實現してゐたに相違ない。そこには寧ろ製版印刷の進歩に負ふ所が多い。第一あの紙質に色彩を施して、あの程度まで成功したことこそ空前であるかも知れない。尚巻五以降寫眞凸版を用い得たことも同じ意味において空前であらう。¹³

この引用は主に色刷りが成功したことについて述べたものである。少なからず語気の強さを感じさせる発言のなかに、読本が安価で提供されなければならないという事情と技術的に高水準でありたいという願いに折り合いをつけることにたいして苦心する姿がうかがえる。そして、写真について付け足し程度に書き添えられていることが意味するのは、写真についての批判を軽く逸らそうとする身ぶりであるとも考えることもできる。写真についての事情は色刷りのそれよりももっと深いものがあるのかもしれない。

以上に「サクラ読本」の写真の全体的配置につ

いてみてきた。全体的に巻が下るごとに写真は増加傾向にある。それは説明的文章のなかでも地理的教材の増加、そして歴史的教材や公民的教材などの説明的文章の多様化とともにある。また、文学でもノンフィクションのものには増加傾向はないものの一定の割合で写真が採用されるようになった。こうした写真の採用が可能になったのは、その製版印刷技術の向上に依るものが大きい。ただし、同時代的な写真の認識からすれば「サクラ読本」全体に配置された写真は、読本の価格面での事情などのために、概して質の高いものとはいえないものとなっている。

3. 「サクラ読本」の写真の具体的考察

3-1. 東京駅の写真

「サクラ読本」全体で写真が最も多く用いられているのは地理的教材であり、その教材における写真はほとんどが東京や大阪などの都市の写真である。そうした写真の利用のしかたは実際的な状況を視覚的なものとして提示するという意味では、基本的に挿絵として絵画を利用する方法とほとんど変わらないと考えられる。たとえば図1は、第三期国定国語読本『尋常小学国語読本』（通称・ハナハト読本、以後「ハナハト読本」と記述）の巻五第二十六課「東京停車場」（pp.100-102）の挿絵と「サクラ読本」の「東京」の挿絵を比較しやすいように上下に並べたものである。

基本的には挿絵のあるページ近くの文章で東京

駅について語られているところがある。そしてそれが示すものとして東京駅の絵なり写真なりが用いられているのだが、ここに示した絵と写真は、ほとんどその構図が変わらない。絵も写真も東京駅の全体を見せるということに徹した構図をもち、建物を正面から撮ったものとなっている。つまり東京駅を具体的に示すということにおいて二つの挿画はほぼ変わらないのである。

では写真を利用することによって何が変わったのか。ひとつにそれは文章との関係のありかたである。友納に似た立場で「サクラ読本」の実践的取り扱いについて述べた浅黄俊次郎（1935）は、「東京の複雑な景観をば、言葉で解らせるには精細に叙述しなければならない。そこをこの教材では叙述を簡明にし、挿繪の寫眞と相俟って、行文を躍如とさせる意圖から寫眞版十枚も挿入してある¹⁶」という。もちろんこうした意図は「サクラ読本」が児童の心理にあったものを教材にするという方針で編纂されたものであるということから出てくるものである。したがって、図1に示した二つの教材は同じ地理的教材といっても文章表現のしかたが異なるため、単純には比較できないものである。その点を差し置いて二つの挿画と文章との関係を見ると、「東京停車場」が東京駅の特徴を具体的に説明するのに対して、「東京」は一郎とそのおじとの会話として「東京駅で汽車を下りると」という文章にしか東京駅は触れられていないということがわかる。「東京」の文章はそ

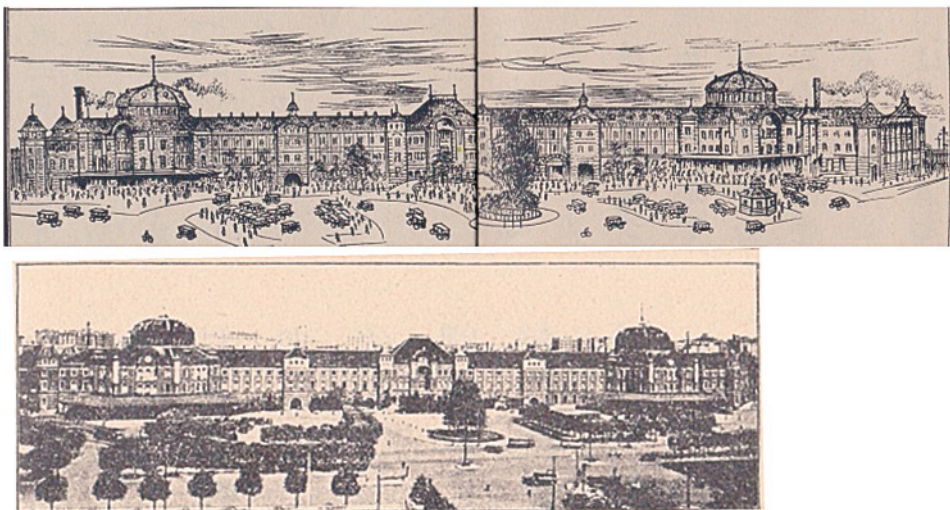


図1 上：「東京停車場における東京駅の絵」¹⁴ 下：「東京」における東京駅の写真¹⁵

の後すぐに東京駅の向かい側にある宮城を訪れた話題に移行してしまう。したがって、おじの発言内容をどんなに詳しく調べても東京駅について知ることはできない。それはむしろ写真が代行しているのである。浅黄は、教材「東京」の冒頭を「下車（東京驛については何も語つてゐない。その代り見事な寫眞で見せてゐる）¹⁷」と記した。写真は、文章が示すことと強く結び付けられているわけではなく、東京駅とはどのようなものかを示す具体的資料として、東京駅を知るためにある。すなわち、ここでは見ること＝知ることのはたらしきを持つものとして写真は使われているのである。このときこの写真を見ることの経験は、東京駅を知るという経験としてなりたつのである。

では東京駅の写真から知ることができることは何か。友納（1935b）はこの写真を次のように解説する。

百二十四頁の東京驛は、宮城側から見た正面全景である。視点は東京驛前の海上ビル屋上から、東方を瞰下すれば此の通りである。右側の丸屋根の下が乗車口、左方の丸屋根下が降車口で、中央が貴賓の方々の乗降口である。前方の並木の内側には數百臺のタクシーや乗合自動車が列をなして客を待つて居る。街路樹はプラタナス（すゞかけ）である。¹⁸

友納の解説は写真に何が写っているかという要素だけでなく、写真には写りこんでいない要素までも解説している。写真を撮る視点や、「タクシーや乗合自動車行列をなして客を待つて居る」様子は、写真には表現されていない。つまり友納の解説は、写真そのものから知ることのできるものについての解説というよりも、写真に写された題材について知っていることの解説なのである。「タクシーや乗合自動車行列をなして客を待つて居る」様子を視覚的に知らせるには、図1にあるように、写真よりも「ハナハト読本」の絵のほうの方がわかりやすい。なぜならこの絵は教材文の「入口や出口の前には、いつも自動車や人力車がたくさん居ます¹⁹」という表現に支えられデフォルメされているからである。「たくさん」いるなどといった心象的なものはむしろデフォルメされた絵のほうの方が表現されやすいだろう。そうしたデフォルメの入る余地が絵に比べてずっと少ない写真のほうは、たとえば東京駅は意外と賑わって

るわけではないかもしれないといったように、心象的な風景との差異の方がむしろ強調されてしまう。車や人はまばらにしか通行しておらず、駅の背後にある建物から煙が上がるさまも見えない。駅の賑わいをみせる要素は甚だ少なく、ただ建物が無機質な物体としてそこにあるようにさえ思えてくる。近代都市の風景を読み込もうとするほど上のような側面がその差異として立ち上がることが、この東京駅の写真を見ることの経験のひとつの可能性であるともいえるかもしれない。

そして、この写真を見ることの経験がもつもうひとつの別の可能性として、単に東京駅を知ることとは関係の薄いものが写りこんでしまっていることを見るということが挙げられる。それは、たとえば背後にあるビル群である。絵のほうでは東京駅の背後にビル群はないが、写真にはそれがはっきりと写されている。このことは、この写真がある視点からみた東京駅を中心とするひとつの景色であるということを示している。友納の解説もこの視点がどこであるのかを明確にしていた。この写真は東京駅だけを模型的に示すものではなく、その周囲までもを含んだ写真なのである。だからこの写真を見る経験は、東京駅を中心とした風景を眺めるという経験でもあるということがいえるのである。

以上に第二十四課「東京」の冒頭に掲げられた東京駅の写真を見る経験について考察してきた。それは基本的には挿絵と同じように東京駅の具体的な姿を示すものであるけれども、文章が示されたこととは異なる次元で東京駅を知るという経験をなりたせるものである。また、絵に比べてデフォルメの入る余地がずっと少ない東京駅の写真を見る経験は、近代都市の風景を読むという経験でもありながら、そうした心象的な風景との差異が強調されてしまう経験を生む可能性をもつものであった。さらにこの写真は東京駅を中心とした風景を眺めるという経験としてもなりたつものである。このように複数の異なる経験がなりたつ可能性をこの写真は持っている。それが読本に写真が入り込んだことの意義のひとつであろう。

3-2. 犬の写真

次に巻五第二十二課「犬のてがら」を取り上げる。この教材は金剛、那智という名前の2匹の軍

用犬についての記録である。ざっとその概要を説明するとこの文章は、伝令を任務とする2匹の犬が軍の突撃の際に一緒にとびこんでいったきり帰って来なかったので、係の兵士が一生懸命探したところ、やっとみつけた2匹は敵兵の軍服の切れ端をしっかりとくわえて死んでいたというものであり、その功績を称えてこの2匹に「甲號功章」と呼ばれる恩典が与えられたというものである。

この教材は巻五で写真が採用された二つ教材のうちの一つであり（もう一つは「おたまじゃくし」）、「サクラ読本」のなかでも最も早い段階で写真を採用した教材の一つである。ここで使われたのは3枚の写真で、一つは軍事練習の場面の写真、一つはシェパードの全体を写した写真、そして最後に「甲號功章」の写真である。

まず、最初に採られた写真が動物である犬という点であるが、「サクラ読本」では巻五に至るまでに犬が挿絵として用いられている教材がいくつかある。図2はその一部を並べたものである。

「オツカイ」と「雪ヨフレフレ」は子どもたちの日常生活の一場面が描かれたものであり（前者は散文、後者は韻文が付されている）、「モモトラウ」と「花サカヂヂイ」は物語の一場面である。



図2 上「オツカイ」²⁰、中左「モモトラウ」²¹
中右「花サカヂヂイ」²²、下「雪ヨフレフレ」²³

日常生活の一場面に登場する犬は「ポチ」という愛称がつけられたペットとしての存在であり、また「花サカヂヂイ」の犬もそのように可愛がられるべき存在である。さらに、「モモトラウ」に登場するのは主人に忠誠を誓い、戦いをともにする犬であり、単なるペットではなく人間的な意志をもった犬でもある。

図2に挙げた挿絵は、人物が右、犬が左という構図で共通している。「サクラ読本」における犬についての挿絵はだいたいこの構図で安定しているといえよう。さらにどの犬も白を基調としている（巻一で最も初めに登場する犬は「コイコイシロコイ」の「シロ」である）。白のイメージは、犬が純粋で従順な生き物であるということを示しているように思われる。また、弱々しいイメージも含まれるかもしれない。実際、「花サカヂヂイ」の白一色の犬は、あっけなく「トナリノオヂイサン」に殺されてしまう。「サクラ読本」の読者たる学習者は、こうした犬像を受け取めながら学習を進めていくのである。

そして、教材「犬のてがら」に至ったとき示されるのは図3の写真である。この写真に登場する犬は、これまでの挿絵に描かれた犬たちとはかなり異なっている。図2のような構図をもって写された犬でなければ、これまでのような白さをもつ犬でもない。まずその表象において、日常生活の一場面で登場するような犬でないことは確かである。一方で黒色のシェパードの前足をそろえ首を上げて前方を見る立ち姿は、「モモトラウ」の犬



図3 上：軍事練習の一場面、下右：シェパードの軍犬
下左：「甲號功章」²⁴

とそっくりである。このあたりはこれまでの犬表象の延長線上にあると考えてよい。あえてその違いをいえば、シェパードのほうは尻尾が立っていない。これまでの挿絵において犬たちはひとりの主人とともに描かれ尻尾を立てていたわけだが、図3の上の写真では多数の人間の間になたずむ犬、下の写真では主人とは無関係にただ一匹でその姿を示す犬であり、両方ともその尻尾は下に垂れている。このように「犬のてがら」の写真は、これまでの犬表象の延長線上にありながらその表象のされかたの異なるものとして読本に採られている。これまでの犬表象の経験からすれば、この写真を見ることは新たな読みの経験をなしたたせるもののだといえよう。

ではこれらの写真を見ることは、教材「犬のてがら」全体を読むこととして、どのような経験をなしたたせるだろうか。それを考えるためには、これらの写真と教材文との関係を明らかにしなければならない。ところが、これらの写真（特に犬が写った二枚の写真）と教材の本文は、じつはほとんど関係のないものである。本文からいえば軍の突撃について語られる場面で二つの写真が挿入されているのであるが、図3の軍事練習の写真は、前傾姿勢の軍人たちではなく、またその犬の立ち方も全く突撃の様子を示すものではないようである。また、シェパードの軍犬の写真はその周囲がどのような状況であるかすらはっきりしないものであり、単にシェパードの軍犬の具体的な姿を示すものとして載せてあるように思われる。このあたりの事情について、「犬のてがら」の写真が当時の軍部からの要請を受けて採られたものだということが、井上尠の記述からたどることができる。

犬のてがらは、満州事變最初の晩の最初の事件でありまして、いはゆる金剛・那智の活躍した勇壯な話、殊に最近國民の血をわかした話であります。これが犬であるという點に於て子供に非常に同情を購つた、その點は別に文句はありませんが、さてこれは陸軍當局にきいて見ますと、こんな教材を入れて貰つては困るといふ。なぜ困るかときいてみると噛みつき廻らせるやうな軍用犬を見せて貰つては困る、日本の軍用犬の體面に係るといふわけであります。そこで、讀本として入れました趣旨は、何も日進月歩の軍用犬の科学的訓練を入れたのではなくて、軍用犬の勇ましい話を國民的感情の陶冶材として入れ

たのでありますから、國語讀本の目的はこの教材で達せられる、しかし軍部の新しい軍用犬の目的は達せられないといふので、挿繪は全く本文と関係のない軍用犬の訓練の場面を入れたのであります。これは金剛でも那智でもないであります。²⁵

教材本文に示された内容が軍用犬のすべてと思われたくないという軍部の要請により図3に示したような写真が採用されたという経緯からみれば、この写真には、文章による一面的な理解をより多面的にするといった役割が担わされていると考えられる。ここに「犬のてがら」における写真の独特な位置づけがある。図3の写真は本文の理解を補助するような役割をはじめからもたされず、本文が暗示的に伝えることがら（軍用犬の任務）を本文とは異なる角度から理解させようとするものである。「東京」の写真についてみたように、写真には基本的に本文の補助という役割が担わされていた。つまりその写真は教材本文が明示的に伝えることがらを補うのであるが、「犬のてがら」の写真はその役割を有していないという点で独特である。まさに、報道写真の理想として語られた「言葉や文字」、あるいは「絵画」とは違った形で送り手のメッセージを伝達する写真」として、これらの写真があるといえる。そしてそのメッセージこそ、軍用犬は文章が描くほど猛猛な動物として用いられているのではないということであり、すなわち本文に描かれた犬像の否定である。このメッセージはどう受け止められるのだろうか。それはこの教材を用いて教師が学習者にどのように読みの形成を促すかということに影響されるはずである。

当時出版された「サクラ讀本」に関する実践的取り扱いについての多くの研究では、「犬のてがら」の写真について、それがどのようなものであるかについて、それぞれ著者の教材分析は示されているけれども、授業構想のなかにそれらの写真を見ることを位置づけているものはほとんどない。かろうじて佐藤末吉（1935）、芦田惠之助（1935/1987）が授業構想に写真の読みを取り入れている。

佐藤の授業構想は全三時間で、第1時全8過程、第2時全6過程、第3時全6過程のなかの第3時第4過程に「挿繪の説明」を入れている²⁶。つま

り教材本文について綿密に読みを形成したあとで写真に注意が向けられるのである。佐藤は「満州事變に於ける軍用犬那智・金剛の壯烈な働きを讀ませ、忠勇義烈の精神を盛にするのが本課の旨要である²⁷」という。この目的を達成する流れで教材文は読まれるのだが、その後にはじめて写真の説明が入ることで、「那智・金剛の壯烈な働き」が軍用犬の仕事だという理解は否定されるだろう。なぜなら写真が伝えるメッセージはその否定だからである。このように佐藤は否定し去る対象を文の読みにおいてあらかじめ形成させておき、写真によってそれを一挙に否定するという流れで写真を見る経験をなりたいたせるのである。

芦田の授業構想については、「第一時はまづ讀ませる。次に挿繪を觀察させる。上圖は軍犬を訓練するところで、下圖は金剛・那智そのいづれでもない軍犬の模式的のものである²⁸」と述べている。佐藤と同様に三時間構想であるが、はじめの読みの段階で写真についての読みは終わらされてしまうのである。写真についての説明があるとすれば単にその写真が何を示すものであるかということくらいである。したがって写真の読みが軍用犬についての知識として経験されるかどうかは芦田の授業構想のこの段階においては全く問題にされず、個々の学習者に任されるのである。芦田の授業構想でもっぱら事実（満州事變やその周辺の実事）と教材文の表現（「しかし」という接続詞や「金剛・那智」と「二匹」という言葉の違い）が取り上げられ、文章による事実の表現についての学習が展開されるようになっている。このことがはじめの段階で形づくった犬像にどう影響するかわからないが、表現への着目によって、「犬のてがら」の感情へ訴えかける文のなりたちを読むことが、そのことと写真が伝えるメッセージとが十分合致しないという気づきを生む契機にはなるかもしれない。

二つの授業構想から写真を見る経験についていえるのは、その経験が写真を読む前後に文章をどう読むかということに深く関係しているということである。「犬のてがら」の写真は教材本文とほとんど関係がないようにみえるがゆえに、本文による犬像の形成と写真による犬像の形成は別次元での経験と捉えたいがそうではないということ、二つの授業構想は示している。

以上に巻五第二十二課「犬のてがら」に掲げられた写真を見る経験について考察してきた。それは巻五に至るまでの挿絵において経験してきた犬表象の延長線上にありながら、いくつかの点で異なる表象として現れる。したがって基本的にこの写真の犬像はそうした犬表象の経験に規定されるものであるが、この写真を見ることの経験は、写真を見る経験の前後でいかに教材本文を読むかということと深く関係している。メッセージ性をもったメディアとして「犬のてがら」の写真を見る経験は、本文の読みとどのように一体となるかによって異なる意味づけがなされるものとしてなりたつのである。

4. まとめとおわりに

本稿では「サクラ読本」を事例として、その写真を見る経験について考察してきた。具体的な写真について取り上げきれなかったものは、たとえば理科的教材における科学写真や巻十一第十九課「燕岳に登る」の飛騨山脈の景観を写したパノラマ写真などであるが、それは見ること＝知ることのはたらしのよくできたもの、あるいは風景を眺めるという経験をすぐれて審美的におこなわせるものとして、これまでに考察してきたものとはほぼ同様の枠内に収まるものと考えられる。本稿で取り上げた個々の具体的な写真の考察、またその写真が用いられた教材については繰り返しのなるので各項でのまとめにゆずることとして、ここでは教科書における写真教材ということについてまとめおきたい。

1930年代という写真の成熟時代に、「サクラ読本」にも写真が採られることになった。それは技術的に質の高いものとはいえないものであったが、教科書を読む経験はこれにより幅が広がったといえるだろう。たとえば「東京」の写真が複数の異なる経験がなりたつ可能性を持っていたり、「犬のてがら」の写真を見る経験が本文の読みとどのように一体となるかによって異なる意味づけがなされるものであったりするように、教科書を読む経験は写真を見る経験の位置づけによって変化するのである。「サクラ読本」以降、どのような写真が教科書に入り込んできたか、そしてそれはどのように扱われてきたかということが、教科書を読む経験を左右するひとつの重要な要素とな

ったわけである。おそらくこれ以降より複雑化していく教科書の写真利用について、さらに詳らかにしておくことが必要と考える。

【注】

- ¹ 東京書籍の説明的文章教材にはほかの教科書会社とちがって精緻な絵画を用いている。他社四社についてはいずれも写真を使用。
- ² 海野弘（1986）「写真の1930年代」（『日本写真全集3近代写真の群像』、小学館、p.171）
- ³ 庄司浅水（1957）『印刷文化史』、印刷学会出版部、参照。
- ⁴ これは後に述べる友納の記述からもわかる。
- ⁵ 飯沢耕太郎（1999）「日本の写真家・歴史と現在」（飯沢耕太郎・石井亜矢子・白山真理（1999）『日本の写真家 別巻 日本写真史概説』、岩波書店、pp.46-49）
- ⁶ 飯沢耕太郎（1999）、p.58
- ⁷ 井上赳（1936）「新読本巻八編纂精神竝に解説」（『同志同行第五卷第八号』、同志同行社、pp.14-15）
- ⁸ 詳しくは野地潤家（2011）『国語教育学史研究』の第5章第2節「[サクラ読本]の研究について」を参照。
- ⁹ 友納友次郎（1933-1938）『教法精説新読本の指導精神』、明治図書
- ¹⁰ 友納友次郎（1935a）『教法精説新読本の指導精神尋常科用巻五』、明治図書、p.506
- ¹¹ 友納友次郎（1936a）『教法精説新読本の指導精神尋常科用巻七』、明治図書、p.249
- ¹² 友納友次郎（1936b）『教法精説新読本の指導精神尋常科用巻八』、明治図書、p.6
- ¹³ 井上赳（1937）「小学読本編纂史」（『岩波講座

- 国語教育第5回配本2』、岩波書店、p.69)
- ¹⁴ 文部省（1926）「東京停車場」（『尋常小学国語読本尋常科用巻五』、pp.100-101）
 - ¹⁵ 文部省（1936）「東京」（『小学国語読本尋常科用巻六』、p.124）
 - ¹⁶ 浅黄俊次郎（1935）『新小学国語読本指導精説巻六』、南光社、p.447
 - ¹⁷ 浅黄俊次郎（1935）、p.447
 - ¹⁸ 友納友次郎（1935b）『教法精説新読本の指導精神尋常科用巻六』、明治図書、p.516
 - ¹⁹ 文部省（1926）、p.102
 - ²⁰ 文部省（1933a）「オツカヒ」（『小学国語読本巻一』、pp.22-23）、pp.22-23
 - ²¹ 文部省（1933b）「モモタラウ」（『小学国語読本尋常科用巻一』、pp.54-75）、p.61
 - ²² 文部省（1939a）「モモタラウ」（『小学国語読本尋常科用巻二』、pp.83-97）、p.84
 - ²³ 文部省（1939b）「雪ヨフレフレ」（『小学国語読本尋常科用巻二』、pp.81-83）、pp.82-83
 - ²⁴ 文部省（1935）「犬のてがら」（『小学国語読本尋常科用巻五』、pp.101-104）、p.102、104
 - ²⁵ 井上赳（1935）「新読本巻五編纂精神竝に解説」（『同志同行第四卷第二号』、同志同行社、pp.10-41）、pp.39-40
 - ²⁶ 佐藤佐吉（1935）『生活学習小学国語読本の指導巻五』、明治図書、pp.463-467
 - ²⁷ 佐藤佐吉（1935）、p.456
 - ²⁸ 芦田恵之助（1935/1987）『小学国語読本と教壇巻五』（古田拡・石井庄司・青山廣志・井上敏夫・野地潤家編、芦田恵之助著（1987）『芦田恵之助全集第17巻教材研究編その四』、明治図書、p.182）